

第12回
九州地区市町村教育委員会研修大会
報告書



平成 29 年 8 月 3 日（木）～ 4 日（金）

於：宮崎観光ホテル

九州地区市町村教育委員会連合会

❧ 研 修 大 会 日 程 ❧

8月3日(木)

12:00 ~ 13:00 13:00 ~ 13:30	受付 開会式	宮崎観光ホテル 東館1階ロビー 宮崎観光ホテル 東館3階「光耀の間」 開会のことば 九州地区市町村教育委員会連合会 監事 永田 政信 会長あいさつ 九州地区市町村教育委員会連合会 会長 松野 隆 来賓祝辞 宮崎県教育委員会教育長 四本 孝 様 宮崎市長 戸敷 正 様
13:30 ~ 14:30	教育講演	演 題「自然教材としての都井岬 ～家畜をやめた現代の野生化馬～」 講 師 串間市エコツーリズム推進室 主査 秋田 優 氏
14:30 ~ 14:45 14:45 ~ 16:15	休憩 パネルディスカッション	主 題「産官学の連携によるキャリア教育の推進 ～産業界が果たすべき役割と責任～」 コーディネーター 宮崎県キャリア教育支援センター トータルコーディネーター 水永 正憲 氏 パネリスト 日向商工会議所 専務理事 黒木 正一 氏 日向市商工観光部 部長 清水 邦彦 氏 日向市教育委員会 教育長 今村 卓也 氏 日向市立財光寺小学校 校長 三樹 和幸 氏
16:20 ~ 16:30	閉会式	次期開催地代表あいさつ 大分県市町村教育委員会連合会 会長 古城 和敬 閉会のことば 九州地区市町村教育委員会連合会 監事 永田 政信
16:30 ~ 17:30 17:30 ~ 17:45 17:45 19:30	情報交換会受付 オープニングアトラクション 開会 アトラクション 閉会	宮崎観光ホテル 東館3階「光耀の間」 村上三弦道 「刈干切唄」「燦々七拍子～未来へ～」 「太陽じょんがら」 月見ヶ丘わかば会ひょっとこ踊りわかば連 「日向ひょっとこ踊り」

8月4日(金) 視察研修

8:30 (9:00) ※	視察研修	Aコース (青島コース) 青島神社、宮交ボタニックガーデン、 道の駅フェニックス Bコース (綾コース) 綾 国際クラフトの城、蔵元 綾 酒泉の杜
12:00 (12:30) ※	解散	

※カッコ内時刻は A コース

パネルディスカッション

主 題 「産官学の連携によるキャリア教育の推進
～産業界が果すべき役割と責任～」

【コーディネーター】

宮崎県キャリア教育支援センター

トータルコーディネーター 水永 正憲 氏

【パネリスト】

日向商工会議所	専務理事	黒木 正一 氏
日向市商工観光部	部長	清水 邦彦 氏
日向市教育委員会	教育長	今村 卓也 氏
日向市立財光寺小学校	校長	三樹 和幸 氏

水永 皆さんこんにちは。本日のパネルディスカッションの進行を務めさせていただきます、宮崎県キャリア教育支援センターの水永と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほどの岬馬の話は、とても興味深くて、楽しい話でした。随所に、最後までおっしゃったんですけども、この学びを子ども達にどうやって伝えていくかという話がありました。今日これからは、次世代を担う子ども達をどう育てていけばいいのか、タイトルを「産・官・学の連携によるキャリア教育」、とりわけ、産業界にはその役割と責任がある、普通は学校と家庭といわれていると思うんですけど、あえて地域とも言わず、産業界にこそ、その責任と役割があるんじゃないか。こういう視点で少し考えを深めて行きたいなと思っております。

全九州の、教育委員の方々が集まっていたいで大変恐縮なんですけども、話をあまり抽象的にしないで具体的にしたいほうがいいと考えまして、宮崎県日向市におけるこの4年間の取組を中心にしてご紹介をし、お話を進めて行きたいと思います。ご了解を賜りたいと思います。

パネラーの方々は、今ご紹介いただきましたので、早速ですが、今年の1月に東京で行われました経済産業省と文科省の共同によります、キャリア教育推進連携表彰の最優秀賞を受賞されました



日向商工会議所の専務理事の黒木さんから、受賞の内容についてご紹介をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。



黒木 皆さんお疲れ様でございます。では、日向商工会議所が取り組んでおりますキャリア教育について概要の説明をしたいと思います。

日向市の人口は、62,747人でございまして、平成18年の大合併で、東郷町と合併をしまして、若山牧水生誕の地が日向市になっております。そして、小学校が14校、中学校が7校、高校が4校ですが、このうちの小中一貫教育校が3校あるところでございます。そして、日向商工会議所は1,

510の事業所で重要港湾・細島港を拠点として、約3割を占める製造業を中心に小さな工業都市という所が日向市かなと思います。

キャリア教育へ取り組む経緯でございますけれども、平成25年8月に、日向市にキャリア教育支援センターを開設いたしました。3名のコーディネーターで、今日のコーディネーターをしていただく水永さんがセンター長で、そして、工業高校の校長先生を退官されました富山先生、そして、小学校の校長先生を退官されました二見先生が出発でございました。この立ち上げに関しては、ここにおられる今村教育長が県におられましたし、三樹校長先生が市の教育委員会におられて、非常に出会いのいい立ち上げができて、この4年間を、皆さんの前でお話ができる状況かと思えます。産業界としては非常に感謝をしているところでございます。

平成26年度に「よのなか教室」をスタートさせまして、「よのなか先生」を募集いたしました。いろんな職業の方々を登録いたしました。神主さんもいます。現在198名の「よのなか先生」をもって、「よのなか教室」を開始しているところでございます。そして平成27年度より、皆さんにやはり事業のPRをしたいということで、2か月に1回キャリア教育通信を、日向市の先生方に配布をしております。それから、平成28年度から、高校生を核とした「高校よのなか教室」ということで、高校生の先輩が、「ようこそ先輩」ではないですけども、中学校に行ってお話をするという様なことをしながら、充実を図っているところでございます。

そしてまた、今までは産業界だけが中心になっていたんですが、PTAと連携することによって、さらに充実を図るということで、平成28年度から啓発活動に着手したところでございます。

それから、「産・学・官の高度な連携によるキャリア教育の推進」ということですが、産・学・官の高度なというか、真剣な連携というところかなと思います。産は商工会議所の強力なリーダーシップが求められます。非常に産業界と繋がりが深い関係で、学校からの相談などについても、我々が中に入ることによって、先生達が容易に協議に入られるという様なことで、商工会議所も頑張っているところでございます。

それから、官については、今までの人づくりは、小学校・中学校と、教育委員会に任せておりま

したけども、これからは官の中でも、商工労働関係が、職業人・社会人づくりに一生懸命取り組んでいただきたいなというところです。清水部長が来ておられますけども、いろいろと支援を受けているところでございます。

それから、学校に対しては、教育委員会をはじめ、校長先生、そして、各学年の先生と連携を取りながら、積極的に展開をしながら、地域と企業、そして、学校、先生と子ども達、保護者をサポートする学校応援団を目指しているところでございます。

それから、「よのなか教室」でございますが、「日向の大人はみな子供たちの先生」。これは商工会議所の建物に看板を掲げております。日向市の大人皆で頑張ろうということで、このスローガンを掲げておりまして、列車からも見えるところでございます。現在、198名ですけれども、300人を目標に拡大をしているところでございます。そして、狙いは、皆さんもこういう期待だろうと思うんですが、子ども達が将来どう生きるかという「生きる力」、そして、当然のことですが学校では、学力の向上という所が一番かなと思います。そして、これからの人口減社会の中で、日向の子ども達が、高校を卒業して喜んで日向に居たいのか、あるいは、東京に行き、大阪に行っても、日向に帰ってくるという様な、進んで、喜んで住み続けたい、戻ってきたい、日向市で産まれて良かった、日向市で育って良かったという様なまちを、全体で作ったらどうかという考え方でございます。そして、次世代を担う子ども達に対しては、働く大人が、日向の大人達が、働く喜びと苦勞を本気で語っていただくこと。そのことを、子ども達の心の中に刻み込むということを考えております。

そして、これは実際、富島中学校の取組の紹介でございますが、少しスライドを見ていただきたいと思います。

では、「よのなか教室」の実施結果でございますが、実施学校数が25校のうち21校が実施をしていただいております。回数が119回。そして、講師数346人が「よのなか先生」で、56人が中高の生徒でございます。参加児童数が延べ10,101名と1万人を超えました。「よのなか教室」の持つ力ということですが、先生方が気づき意識が変わったということと、社員自身が成長の場になった、退職者は生きがいが生まれた。そして何より、子ども達が普段先生から言われていることと「よのなか先生」の話とが符合するので、理解が深まり、成長するという力を感じております。

それから、児童・生徒・保護者の意識の変容でございますが、将来の夢や目標を持っている子ども達が、全国よりも少し日向の場合は高くなっております。また、アンケート結果でも、「将来のために今学習は大切ということ」が91.7%となっております。

それから、これが先ほど紹介にありました、キャリア教育推進連携シンポジウムで、最優秀賞をいただいた授賞式の状況です。日向商工会議所の三輪会頭が、表彰式で授賞しているところの写真でございます。どうもご清聴ありがとうございました。

水永 ありがとうございました。宮崎県におきましては、県教育委員会が、平成24年、ちょうど5年前になりますけども、キャリア教育の基本方針を定められまして、日向市をパイロット地区として選定されました。そして、ちょうどそのときに、県教育委員会で直接ご担当されておられまして、現在は日向市の教育長をなさっております今村さんからその当時の経緯ですとか、考え方ですと

か、構想についてご紹介いただければと思います。今村さんお願いいたします。

今村 皆さんこんにちは。日向市の今村と申します。改めて、今、こうやって見てみますと、いろいろなことをやって来たんだなと思いながら見せていただいたところでありました。

お話にありました様に、当時、私は県の教育委員会の義務教育の課長職にありまして、当時のキャリア教育の担当者と一緒に、日向市に、この県のパイロット事業を引き受けていただける様にお願いに参ったわけですが、その前段にいくつかのことがありました。

今、水永さんのお話にありましたけれども、平成23年度に県の教育委員会が、これからの宮崎県教育をどうするかという、そういう諮問をしたんです。学校教育改革推進協議会というところに諮問をいたしました。そのときの答申というのが平成23年度末に出まして、これからの本県教育においては、小中高、特別支援学校の12年間を見通した、宮崎にふさわしいキャリア教育の推進を図ることが必要だという、そういう答申をいただきました。それが契機になりまして、じゃあどうするかということで平成24年度に、宮崎県キャリア教育ガイドラインというのを作って、これからの進め方を県でまとめたところなんです。その、大きな柱となっているのが、「縦の連携」と「横の連携」ということであります。

「縦の連携」というのは、想像がつくとおりですが、小中高、特別支援学校の12年間で縦に繋いでいくという取組です。ただ、縦でそれぞれの校種が連携するだけではなくて、その横にキャリア教育支援センターというのを置いて、この支援センターが小学校にも、中学校にも、高校にも、特別支援学校にも関わるという、「縦の連携」にも支援センターが関わるという、そういう「縦の連携」と、「横の連携」は家庭や地域の、そして、企業や産業の皆さんと連携をしていくわけですが、それを束ねるのもキャリア教育支援センターが行うという、そういう縦横の連携を図るということを、決めたことであります。

この大きなことがありまして、それから取組がスタートするということになりますけれども、企業や学校にとっても、どちらにとっても Win・Win の関係になれることが一番いい。企業だけを学校が使って、学校だけが得をするのではなくて、そういう人材を育てることがやがて企業にとっても大きなプラスになるんだよという、お互いに関わり合うという、そういったことができる様ということを目途として、市町村探しを始めたんです。

それを日向市にお願いに行こうという話になったんですが、日向市になぜお願いに行ったかというと、日向市にこんな土壌があったということがあります。一つは、早くから全国で初めての小中一貫校、一体型の一貫校が東京の日野学園と一緒に開校したというのもあって、一貫教育に取り組んでおられるということ、同時に、コミュニティスクールに取り組んでおられるということがあ



りました。全国的にはキャリア教育と小中一貫教育とコミュニティスクールというのはセットで取り組んだほうが非常に効果的であると思っていますが、そういう基盤が日向市にはあったというのが一つです。

そして、教育委員会が独自に企業による出前授業という取組を早くからやっておられたということもあります。また、商工会議所が地域の教育に大変熱心で、産業界を束ねていただくには非常にふさわしいなと思っていたこと。そして、日向市当局が人材づくりということに、非常によく取り組まれておりまして、県のパイロット事業というのは3年間の限定でありますから、それが終わった後、金の切れ目が何とかで事業が終わると大変だけでも、日向市だとずっと自前を出して、続けていただけるのではないかと、それぐらい熱心だと思っていたこともありまして、日向市にお願いをさせていただくことになったところであります。

それぞれに非常に素晴らしい取組を重ねていただいて、一体となった取組になって来たかなと、今は思っておりますが、当初は県が用意しました500万くらいの予算に、市がさらに上積みしていただき、商工会議所も出していただいて、700～800万くらいの予算で事業がスタートいたしました。3年経って終わった後は、今度は日向市が、1000万を超えるお金を掛けて、その事業を引き継いで、今に至っています。そんな状況で先ほど見ていただいた様な取組が継続的に実施されてきたという、そんな経緯がありました。

水永 はい。ありがとうございます。学校教育に関わるというときに産・官・学というふうに言ったんですけど、官です、市長部局ですよ、そこがなぜ学校教育に関わるのかということは、疑問に持たれる方がいらっしゃるんじゃないかという気がするんです。今、日向市では市長部局である日向市の商工観光部がここに関わっていただいているんですけれども、清水部長の方から日向市の行政として、この学校教育、次世代を担う子ども達を育てるところにどう関わってこられたのかというあたりをご紹介していただきたいと思います。

清水 皆さん、こんにちは。日向市商工観光部長の清水でございます。スライドの方にもございましたけども、日向市は、宮崎市のこの会場から車で北へ1時間ほどにございます。県北部に位置しておりますけども、重要港湾・細島港を核といたしまして、商工業、主に「ものづくり産業」が集積をしております。市のまちづくりの方針といたしましては、港湾工業都市を目指しているところでございます。また、市内の事業所は約3,600社が立地をしているところでございます。本市では平成26年3月でございましたが、日向市中小企業振興計画を策定いたしまして、中小企業をいかに支援をするかというところを基本理念として、「創造、挑戦するまち日向～地域力を結集し人材と企業力を磨き上げ



る～」を掲げ、4つの支援策を主要施策として展開をしているところでございます。この中で、人材の育成と教育の支援では、その拠点施設として、「日向地区人もものづくりセンター」を、平成28年の4月に設置をいたしました。ここではものづくりに関する講習会や技能者のスキルアップ研修、それから、子どもさん向けのセミナーなどを開催しているところでございます。

特徴的な事例といたしましては、7月に小中学生を対象とした「ロボットセミナー」、10月には「技能祭り」というものを開催しております。技能祭りでは会場内に約30の体験ブースを設けまして、例えば、建築、左官、塗装、板金などの実務体験を実際の技能者と一緒に体験する。そして、技能者と一緒に交流を図るという様なところを狙いまして、若い世代がものづくり産業への理解や、興味を持っていただく様なイベントなどを開催をしているところでございます。毎年、1,500名から2,000名の来場者がございますが、その約半数が、小学校以下のお子さん方でございます。また、市内の工業高校の機械科を専攻する生徒さんに対しましては、日向市若手ものづくり講習会として、市内企業の溶接事業者、これは全国規模で優勝をされたマイスターの資格を持っている方に指導をしていただいております。その結果、九州高校生溶接技術競技会においては、平成26年度から毎年、高い成績を収めておりまして、平成29年度は、これまでの3カ年の成績が認められまして、来たる8月6日に愛媛県の新居浜市で開催されます全国大会に出場することとなったわけでございます。

また、市内と近隣の3つの高校の就職担当の先生方といろいろなディスカッションを行いまして、ご意見や提言を承りました。進路について具体的に考え始めるだろうという高校1、2年生を対象といたしまして、企業説明会を開催し、これは各事業所がブースを設けまして、自社のいいところ、アピールしたいところをPRする機会を作って、高校生と企業、高校生と事業主とのマッチングの場を提供しているところでございます。

それぞれに成果が上がっておりますけれども、今後はこの様な交流の場をさらに作り、取組を行いまして、例えば、小中学校の小さいうちからこの様な取組を積み重ねていくことが必要であると考えております。今後、小学校、中学校や教育委員会、事業所、行政が連携し、「働く」ということはどういうことなのか、また、どの様な「仕事」があるのかなど、子ども達が仕事を「学ぶ」環境づくりに対しても、市としても具体的に施策を確実に展開していきたい。その様なことが重要ではないのかなと認識をしているところでございます。以上でございます。

水永 はい。ありがとうございました。ご記憶でしょうか、3年前に増田レポートというのが出て、地方消滅という非常に衝撃的なことが言われ始めて、地方創生がうたわれ始めました。

今、宮崎県でも、この日向市でも若者の流出が続いています。この図は右側が女性で左側が男性の人口ピラミッドですけれども、赤い実線のところが全国平均なんです。全国平均より少ないところは、下の方を見ていただくと明確に19歳～22歳なんで



す。高校卒業してから大学卒業するまでの間というのが、激減しているわけです。

次の図は、九州各県の高校生の県内就職率です。上から福岡県、大分県、沖縄県とあります。全国では、それぞれの県内就職率の平均が81%ですが、宮崎県は55%と全国最下位になっています。右側はその中の、さらに工業高校だけを取ったものです。工業高校には全国から一流企業の求人が沢山来ています。工業高校は38%しか県内に就職をしていないという、こういう状況が続いています。先ほど申し上げましたとおり、宮崎県は高校生の県内就職率が55%で全国最下位が2年連続。今年の3月がどうなるか、近々発表になるかと思います。もう一つは、これの方がむしろ深刻かもしれないんですけれども、県内の高校と大学を卒業した若者が3年以内に会社を離職する離職率です。これが宮崎県では大学卒が40%、高校卒が48%、いずれも全国平均より約10%高いんです。なぜこういう状況が起きているのか、様々な意見がありますけれども、実はこんな状況が今あります。

こういったことを踏まえて、キャリア教育を本格的にスタートしようということになったんですけど、こういう状況を踏まえて、どの様に取り組んで行こうかと考えられたのか。先ほどの産・官・学の中の産と官のお二人にお考えを、紹介していただければと思います。最初に官である行政の清水さんの方からお願いいたします。

清水 先程のグラフにもございましたとおり、若者の県外への流出は、本市の産業構造や、まちづくりにおいて、大きな痛手となるものでございます。日向市ではこの様な中、地方創生の総合戦略が、全国のいたるところで策定をされておりますけれども、平成27年10月に、「元気な日向市未来創造戦略」を策定いたしました。その中で基本的な理念として、「ふるさとを愛し、日向市の未来を支える人材の育成」というのをテーマに掲げまして、「日向の若者が未来を作る」、そういったプロジェクトを重点プロジェクトとして、基本目標に4つの未来創造戦略を掲げたところでございます。

その基本目標の大きな柱の一つに、「仕事を作り出す未来創造戦略」として、「よのなか先生」を核としたキャリア教育支援事業を、市の施策の1丁目1番地に位置付けました。キャリア教育につきましては、子ども達の学力と生きる力を向上させ、子ども達が地域に喜んで住み続けたいというまちにするため、産・官・学や地域の大人達が連携をしまして、「日向の大人はみな子供たちの先生」をスローガンに、キャリア教育や「よのなか教室」を市民運動として推進することを総合戦略に掲げたところでございます。

先ほど、高校1、2年生を対象とした企業説明会について事例を申し上げましたが、そのこの評価のところで、アンケート調査を実施いたしました。生徒さんからは「地元の企業名や仕事の内容、各事業所の特性について理解する良い機会となりました。」先生の皆さん方からは、「市内の企業に就職することを目指している生徒さんが出てまいりました。」さらに、企業体側におきましては、「これまで求人に対し、積極的な取組をした経験が少なく、高校生の意見を聞く良い体験となりました。また、自社の強みをどの様にプレゼンテーションし、理解してもらうかの気づきになりました。」など一定の評価が得られたところでございます。

しかしながら、一方で、同じ高校1、2年生のアンケート調査結果からは、ショッキングな結果

が出ているところでございます。回答した約440名の市内の高校生のうち、「就職において希望する職業について考えているか」の質問に対し、肯定的な回答が88%と高かったわけでありますけれども、「日向市が好きだ」が68%、「将来日向市で働きたいと思っている」が40%に止まったわけであります。この2つの話から、市内には優れた技術や素晴らしい業績を持っている企業があることをまだまだ知らない。そういうギャップがまだ埋められていないという課題が見えてきたわけでございます。今後は、行政が市内の企業や事業所を紹介できる機会をどの様に作るのか、また、その仕組みづくりとともに、地域にある企業を広くアピールし、地域の宝としての企業や事業所について、生徒、児童の皆さん、そして学校とのマッチングを図っていくことが、本市の産業振興と地方創生において重要であると考えているところでございます。

水永 はい。ありがとうございました。地方創生と2年前に叫ばれて、全国の市町村で総合戦略が立てられました。それぞれの市町村で総合戦略を立てられた中で、日向市の総合戦略の中の1丁目1番地にこの「よのなか教室を通してキャリア教育を推進する」とうたわれている。こういう都市は他にはないでしょうね。あるんですかね。人材育成の1丁目1番地のところにこのキャリア教育的な視点というのはあまりないでしょうね。

清水 調べたことはないんですが、おそらく無いと思います。日向では、いろいろな計画を作るときに、地元の皆さん方とか、市民代表の方、それから企業の方からいろいろなご意見をいただくんですけれども、今、一番悩んでいるのは何なのかといったときに、雇用の問題と担い手づくりというのが第一番目に来ましたので、そういう意味で、1丁目1番地に位置づけたところでございます。

水永 はい。ありがとうございました。続きまして、産業界を代表して、商工会議所としてはどんなお考えだったのかお話いただけますでしょうか。

黒木 では、産業界の視点から述べさせていただきたいと思います。宮崎労働局が、県の6月の有効求人倍率の発表をいたしました。1.43倍でした。そして、それは4か月連続最高更新をしたと発表されております。その中で県南の都城では1.6倍、日向市では1.1倍でした。このことは、景気要因よりも人口減少に伴って、地域の経済活動を支える人材の絶対不足というのが構造的な大きな要因かなと考えています。人口減少を避けることのできない地方都市の宮崎県、あるいは日向市では、今後、人材不足が慢性化し、その争奪戦がより激しくなると考えているところでございます。人手不足を生き抜くための戦略として、高校の先生が、地元へ生徒を送り込んでいただけないという学校側に対する一方的な不満でなくて、企業経営者や人事担当者が選ばれる企業というものを考えていかなければ、到底厳しいと考えております。改善策としては、早めの企業紹介や、早い時期の求人票の提出と、給与のアップ、あるいは長期休暇、又は家族休暇等々の福利厚生。あるいは、できたら将来の生活設計など、広い視野での信頼関係を築く努力が必要だと考えています。

また、出口の高校生の部分だけではなくて、幼稚園、小学校、中学校の課程の中で、地元の多面

的な素晴らしさや、産業・企業の紹介など、産業界、市民が学校側と連携をしつつ積極的に取り組んで、将来を担う子ども達が、この日向市で育って良かった、住んで良かったと実感できる環境づくりが重要だと思っています。この様なことを、小学校、中学校で日向の良さというのを積極的に刷り込んでいきたいと思っております。

昨年11月でしたが、NHKテレビの「なるほど日本、日曜特集」で放映されましたインタビューの中で、宮崎県のある高校の先生は、県外大手企業を勧めていると答えておられました。一方で、昨年3月の県内就職率88.3%の福井県の高校では、企業経営者が足繁く学校に訪問して、非常に学校と地方企業との信頼関係が築かれて、先生も地元企業を勧めているというお話がありました。どこの県の先生も、生徒の幸せを願いつつ、就職の指導はされていると思います。これからは地元企業と経済団体の産業界が、もっと積極的に、真剣に、学校や保護者に関して地元企業の魅力の紹介をする役割・責任が非常に重要だと認識をしているところでございます。

水永 ありがとうございます。黒木さんは先月、福井と富山の学校に視察に行かれたんですね。そこで、宮崎県も学んだ方がいいかなと、福井とか富山の学校を見られて感じられたことって何かございますか。

黒木 福井県と富山県を視察して来たんですが、県自体が非常に教育熱心だと感じました。学校の施設、あるいは先生達の配置なども感じましたが、商工会議所の青年部の方が、この人材づくりは私達将来の事業投資だと、ボランティアではありませんと、将来に対する投資だと考えて頑張っていますという言葉を受けたときに、我々日向商工会議所も若い青年部を、もっともっこの人材不足に対する、あるいは、小学校、中学校の人づくりに関する、事業というのを展開しなければいけないというのを感じたところでございます。

水永 次世代を担う子ども達、義務教育にいる小学生や中学生を育てるのに関るのは、ボランティアではないと、社会投資だと、そういうふうにおっしゃったわけです。こういう考え方をされている経営者の方々が、福井や富山にはかなりいらっしゃるという様なお話であったと思います。

それでは視点を変えまして、実際の学校現場で、日向市の学校現場で、どんな取組が行われているのか、これも同じく、1月に文部科学大臣賞を受賞されました、日向市立財光寺小学校の校長の三樹さんの方から、一つの例として取組の紹介をしていただきたいと思います。お願いします。

三樹 皆様こんにちは。私は日向市立財光寺小学校で校長をしております、三樹和幸と申します。早速、本校の取組について紹介させていただきます。なぜ、本校がキャリア教育に大きく舵を取ったのかと。そこには、県教育委員会や市教育委員会、キャリア教育支援センターの思いと、私の強い焦燥感もあったからなんです。

例えば、大規模工場を誘致したとしても、AIの浸透で人間が極端に少ない労働現場であったり、子どもの成長の多くの部分で、なんでも責任を負ってしまっている学校の一人ぼっち感であったり、

先ほど、水永センター長がおっしゃいました、高止まりの離職率であったり。大企業に行けば幸せになるはずと、検証無しで子ども達に学ばせている教職員であったり。本当に子ども達は、この先行き不透明な時代を生き抜いていけるのでしょうか。この課題を解決するには、働くこと、学ぶことの意味を捉えて、多様性に違和感を感じずに挑戦する人間の基礎づくりが急務であると考えたんです。

そこで、これから次の4つの観点で報告をさせていただきます。キーワードは「ネットワーク」、「外部人材のプロの技術」、「教職員の主体性」、「PDCAサイクルの改善」です。

はじめに、学校のもつネットワークや人材を活用した実践です。先ほど、高校生の問題を清水部長さんが話をしましたけど、小学生にとっての未来というと、朝顔の種を植えてまた咲いてというぐらいで、なかなか将来を見通すのは難しいんです。例えば、小学生にとっての近未来は高校生でもあります。小学2年生では、地域の特産である「へべす」を使ったゼリー作りを、地域の商業高校生から学びました。ちょっと遠かった高校生が、食品を扱う身支度をばりっと決めて、マンツーマンに近い形で教えるのですから、子ども達との距離が変わって、学びも深まりました。ここに、純な子どもの気持ちが表れている学習シートがあります。(スクリーンを指しながら)皆で作るとどんどん楽しくなって来ました。高校生にとっても、自分の学校の調理室では上手く固まったゼリーが、固まらなかったり、説明が上手くできなかったりもしました。人に正しく伝えたり、実現できたりしなければ、実は本当は理解できていないわけですから、高校生にとっても、学び直しの良い機会になったと思います。高校生は、次の年にはしっかりと反省を生かしたチャレンジを見せてくれました。

次に、学校技術員の活用です。外部人材の活用もちろん大切ですが、まずは校内の人材資源に目を向けました。これは1年生の実践です。キャリア教育を教諭だけで進めるのではなく、児童にとっての身近な働く人の価値観に触れ、働く人の思いや願い、大切にしていることを学びました。学校技術員は、教諭と綿密に打合せをし、ここに載っているのはこの学校技術員のお手製の原稿なんですけども、こうやって原稿を練り直し、道德の時間に活用することができました。実践後は児童との距離があっという間に縮まり、1年生は「学校を直すプロ」と呼んで関ろうとする姿も見せたので、学校技術員自体のモチベーションも大いに上がり、実践の改善案を、また準備するほどでした。

次に、外部人材のプロの技術を生かした実践です。5年生では、新聞作りが国語の時間で計画されています。本校では、実際にテーマを決めて文章を書き、校正するところまで新聞記者さんに関っていただきました。その中で、プロの技術だけでなく、伝える側として大切にしていることなど、新聞作りそのものの意味も喜びも学べたのです。また、前年度に、総合的な学習の時間に作ったお米がなかなか売れなかったこともあり、そのお米のパッケージ作りにデザイナーを招きました。図画工作の時間です。単純に思いつきのデザインだったものが、伝えたいことを前面に出すこと、分かりやすいデザインにすること、基本情報はしっかり入れることなど、プロからのアドバイスを受けて、改善されたパッケージを貼ったお米は、なんとバザーで最速の30分で完売し、子ども達大喜びでした。その中で、デザイナーさんが大切にしていることや、仕事の喜びも学べたので、

図画の学びと社会が少し繋がった時間でした。また、プロの技術と自分達の技術を直接比べて、学びを深める実践も行いました。

これは、市内の清掃メンテナンス会社の人を呼んでの実践なんですけども、子ども達なりに精一杯机や椅子を清掃させました。しかし、プロが持ってきた機械で測ると、かなりの塵がまだ残っていることが分かりました。その数値では、例えば病院などでは絶対に許されないことや、汚れ易い場所はしっかりあるんだということを、プロから沢山教えてもらって、気づきもありました。そこで、子ども達は何のために掃除をするのかということも再確認できました。ただただ掃除をしなさいではなくなったんです。掃除の意味が分かったんです。

さらに、異文化と繋がりました。多様性を理解し、様々な働く意味を理解できる取組でした。国際交流員の協力を得て、アフリカのセネガルの小学校と、ビデオレターの交換による学習を展開しました。本校とセネガルを結ぶビデオレターは、往復3回行いました。お互いが送ったビデオを見ている様子の映像も冒頭に入れながら、相手の反応を見ることを試みました。結果として、互いに交流しようとする気持ちがあれば、地球の裏側であっても可能なこと、そこに関わる仕事をしている協力隊の青年の思いを知れたことは大変有意義でした。まさに、多様性に触れることができたのです。ちなみに、こちらから送ったビデオで一番セネガルの子ども達が反応したのは、日本の歌でした。セネガルはフランス語なんですけれども、言語の壁を越えて、歌が繋がることを目の当たりにした子ども達は、違った意味で、音楽の学習を捉えることができたのです。

三番目の柱は、教職員の主体性を生かした実践です。一生懸命勉強しなさい、そしたら必ず社会で活躍できると言っている先生達が、本当に社会を知る努力をしているのでしょうか。卒業後の子ども達が、不適応を起こしたり、ドロップアウトしていく姿を、本当に知っているのでしょうか。私は極めて不十分だと思います。そこで、教職員の社会観を広げることに着手しました。夏季休業中に地元企業の見学、その企業の経営者や、若手従業員の本音などを聞きだす研修を企画しました。そこでは、子ども達が社会で必要とされるもの、別の言い方をすれば、測定可能な学力ではない能力や資質も含めて考える契機となりました。また、受験科目とは関係ない技能教科に関する芸術体験学習や、協議を通して教師の世界観を広げたりしました。つまり、音楽や美術、技術を生業にしている人の考えを聞き、何のためにそういう教科があって、人生を支えているのかを考える研修を行ったのです。それを理解した上で、技能教科を指導して欲しいという思いを、職員は理解してくれました。

また、これまでにあった行事との関連も、強化しました。学校には、実に様々に、消防士、劇団員、警察官など沢山の人が来てくれます。そして、その人達で成り立っている行事があります。ところが、その方々の生き方、喜び、職業観に触れることは、それまでは無かったのですが、この行事に関する外部人材を、活用しようと思いました。例えば、ここにある劇団員は、「自分が描いた夢は、周りに語り続ければチャンスが訪れる、発信し続けることが大切。」という話をしてくれました。そうすると、表現って大切だなと、学校で言われているけれども、本当に自分から表現するって大切なんだということが分かります。また、日向市では、キャリア教育支援センターが、「よのなか先生」の学習会をしています。せっかくそこで「よのなか先生」の強みが分かるのですから、センターか

ら派遣されて、学校でキャリア教育をするだけではなくて、こういった研修会に職員が出て、学校とのマッチングを考え、講師の手ごたえ感を得た上で、招聘することも挑戦しました。そのことによって、学校に来ていただいて、話をしていただいたけれども学びが薄い、といった様なことを避けることにも挑戦できたんです。

最後の柱は、PDCAサイクルの改善の常態化です。20項目に渡る定量的な比較、子ども達の意識を比較していったんですけれども、こういった分析の上で、前例踏襲主義に陥らない様な、新たな実践を広げて、多彩なアプローチを展開しています。多彩なアプローチは、日向市キャリア教育支援センターにアップしておりますので、ご覧いただけると幸いです。

そして、こうした取組についての理解を得るために、PTA新聞による特集記事、あるいはHPなどで、リアルタイムの情報発信を行っております。保護者が「うちの学校ってキャリア教育をしっかりやっているよね。」と言ってくれる様になりました。また、保護者の中の魚屋さんが、「マグロを捌いたりするということも、学校で見せたいんだけど。」と、何とか学校に協力しようという方々も現れたりしました。成果としては、多様な価値観に触れることができた、あるいは、活動の達成感が高まった、子ども達にとって、外部人材への尊敬とか、憧れを抱いたりすることも多くなった。そして、学ぶ意欲の向上とか、継続に繋がっているのだということがあります。

課題としては、本当は、キャリア教育をやったら学力向上と言いたいんですけれども、学力の数値的な向上を、経年的に示せるデータは十分ではありません。しかし、学ぶ意欲自体は、高まっております。もう一つの課題として言いたいのは、外部から人材を呼んだときに、「はいどうぞ」では無くて、テレビ番組ではないですけれども、「徹子の部屋」とか「サワコの朝」の様に、「よのなか先生」のもっている宝を、教師自身がどう引き出すか、そういう力量を、まだ高められていないと考えております。以上で簡単ですけど実践の紹介を終わります。以上です。

水永 どうもありがとうございました。今、新しい学習指導要領が、段々と明らかになってきておりまして、その中に「社会に開かれた教育課程」という言葉があります。これはどういうことなんだろうと、私は、最初は全く分からなくて、いろいろな方々に、いろいろ話を聞いたんですけれども、学校と社会との連携を、さらに深めていこうという動きになってきているということだと思っております。これから、そういう意味で、学校と社会との連携を、さらに深めていこうという視点に立ったときに、これからの日向市での取組を、どの様に考えていらっしゃるのか、日向市教育長の今村さんにお話いただきたいと思います。よろしくお願いします。

今村 はい。失礼します。お聞きいただいていると、お分かりだと思いますが、企業側の商工会議所の黒木専務にしても、学校の校長先生にしても、見ている方向というのは本当に一つになっているなど、私は思っています。企業の皆さん、実はコーディネーターの水永さんも企業出身の方であります。「社会に開かれた教育課程」という話を普通にされるわけです。そのことが、一緒になって子ども達を育てようとしてることだと思っています。

この「社会に開かれた教育課程」ということが、言われてはおりますけれども、様々な理念もい

ろいろと言われてもいます。国が言っていることをよく紐解いてみると、方向としてはやっぱり、地域の人的・物的な資源を積極的に活用するとか、学校教育を地域社会と共有したり、連携したりするといったことが言われていますので、もう少し考えれば、やっぱり企業や地域の方々が、子ども達の学びにこれまで以上に関心をもっていただいて、学校の教育課程の中に積極的に関わっていただける様に、教育委員会や学校としては、教育課程を柔軟に編成していくといえますか、そういったことが、非常に重要だと思っているんです。日向市の教育委員会も、やりたいことはいっぱいありますし、課題もいっぱいあります。

今、三樹校長先生がお話をされたとおり、学力向上に繋がられればということがありましたけれども、一番考えているのは学力向上です。キャリア教育を通して学力向上を図りたいと思っています。正確に言うと、学力向上の一助にしたいと思っています。先程のスライドでも出ていたと思いますが、支援センターの皆様も、企業側も、学力向上を図りたいということをおっしゃっていただいて、その目的は、非常に一緒になっていると思っています。子ども達が将来にわたって進学したり、就職したりするときに、こんな仕事に就きたいと思ったときに、それだけの力をしっかりとつけてやるということは、我々の責任なんだと思っています。キャリア教育と学力向上というのは、決して乖離したものではない、一体的なものであると思っています。学び方については、学校の先生達が必死になって、教え方、学び方などいろいろなことを身に着ける。それが仕事です。縦軸と横軸で見ると、学力向上というのは先生達が一生懸命やれば、ある程度は上がるんですけども、何のために学ぶかという、子ども達のその意欲が無ければ駄目です。だから、私はこういう勉強をしたいとか、この仕事に就くためにこういうものを学んで行きたいとか、力を付けたいという、その縦軸の意欲というものと、先生達の指導力という横軸があって初めて右肩上がりに上がっていくものだろうと思っています。その縦軸の意欲に関する部分も、実は地域の大人達、キャリア教育支援センターが派遣してくださる「よのなか先生」とか、そういう方々が、いっぱいいろいろなことを教えていただいていると感じています。

先程のスライドにありましたが、仕事について語りかけているし、自分がこんなところで挫折したということも、赤裸々に子ども達に伝えています。私はこんなふうやってきたという自分の生き方を伝えていただいています。いろいろな方々のいろいろな生き方や考え方を、子ども達に伝えることによって、子ども達はそれを受け止めて、自分の力にまた変えていくのかなと思っています。そのことが一つ大きなポイントです。

もう一つは離職率だとか、人口減少だとか、将来を担う働き手の数の問題とか、いろいろなことがあるんですが、どの市町村も、自分達の地域から人が少なくなる、子ども達が少なくなるというのは切実な問題です。となると、選ばれる日向市になりたいというのが私達の願いです。選ばれるまちになるためには、小さいうちから子ども達にそういう教育をしっかりと、一体となってやるという、そういった思いが「日向の大人はみな子供たちの先生」というスローガンを掲げることになっているし、それを堂々と商工会議所の壁面に掲示しているということであって、掲示することで、その責任を皆で果たしていくという、そういう意欲の表れでもあるのかなと思っています。

そうすると私達がしなければならないことは、やはり、ふるさとを愛し、ふるさと日向を大切に思っ

て地元日向で暮らしたい、地元日向で仕事に就きたいという、心からそんなふうに思ってくれる逞しい子ども達を、沢山育てたいなということだと思っています。そのためにも、学校は学校でそういう仕事をいっぱいしてもらっていますし、地域は地域で関りを深めていただいていますし、産業界は産業界でいろいろなアプローチをしていただいているところでもありますけれども、そういうことを一体となってやりながら、子ども達に生きる力を付けていくこと、それが今の教育委員会の願いであります。

水永 はい。ありがとうございます。皆さん、聞くだけでは面白くないのではないかと思いますので、少しワークショップの時間を設けたいと思います。お隣の方と少し意見交換をしていただきたいんです。ちょうど3人ずつ座っていらっしゃるの、真ん中の人少し席を引いて。「これからご自身の地域でキャリア教育を進めていく上で、どんなことが課題になるだろうか」というテーマで、お隣の方と3分間しかないんですけども話していただけないでしょうか。どうぞお願いします。

(意見交換)

大変申し訳ございません。もっと時間があるといいんですけども、3分が参りましたので、この辺で意見交換を終了していただけますでしょうか。次に入らせていただきたいと思います。せっかくの機会ですので、今までの話とかいろいろお聞きになって、是非聞いてみたいとか、こんなことを考えているとか、ご意見がある方とかいらっしゃいますか。いらっしゃったら一人か二人お聞きしたいと思うのですが。

福岡県行橋市 笹山教育長

福岡県行橋市の教育長の笹山でございます。大変興味深いお話を伺いました。参考になりました。質問させていただく前に、我が市のことも少しお話をさせていただければと思ひまして。我が市は人口が73,100人くらいのところです。現在、人口はそのまま止まっています。やや微増といえば微増です。毎月10人くらいですが、増えているという感じ。そして、小学校は11校、中学校は6校、市内に県立高校が2校あります。一つは進学校で、一つは職業校です。



お聞きしたいのは、キャリア教育を私達も考えてはいるんですが、キャリア教育を考えるときに、市の教育委員会はどうしても小学校、中学校までしか管轄をしていません。どうやって、高校との連携をとるか。高校は、県立の高校であり、人事も県が行いますし、また、カリキュラムも全て県の方でやっています。そして、市内にある学校は、一つは職業校で、一つは進学校ですが、市内以外からもその高校に進学してきます。この様な形の中・高の連携、小学校からのキャリア教育をいかにして高校に繋げるかということについて、日向の場合は4校あると伺いましたので、その連携について、どの様にされているか伺えたらありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

今村 はい。私の方でまとめて、足りないところがもしあれば、補足していただきたいと思いますが、日向は若干少なく、61,000人くらいの人口でありますけれども、小学校14校、中学校7校、高校がお隣まで入れて4校ございます。

小中高、幼を入れることもあります、小中高の連携会議というものを定期的に、キャリア教育支援センターに行っていて、市の教育委員会もそういう会議を行っていて、そこにはお互いに出席しあいながら、一緒になって、そういう連携を深めているということが、まず一つあります。

市の総合計画の1丁目1番地に今位置づいているのは、「人づくり」ということなんです。「人づくり」というのは小中学生だけではなくて、日向市民の「人づくり」でありまして、小学校段階も中学校段階も高校段階も含めての「人づくり」でありますので、直接の管轄ではないのですが、私の立場では、全て高校も全部日向市立の高校のつもりでやるということを高校の校長先生方にも申し上げております。市長部局の方も、高校生の育成にお金を出していただいています、高校生の課題解決学習を図るために補助金を出したりもしていただいているところなんです。

ですから、地域の大人が皆で小学生、中学生、高校生を育てるということと、冒頭に申し上げました様に、小中高がしっかりと繋がっていく、取組を繋げていく、そういうことが非常に重要で、それにキャリア教育支援センターが横から、小にも、中にも、高にも関りながら楔を打つと言ったらおかしいですが、そういう確認をしながら取組を進めていただいています。

現在は高校生の発表会にも、市の教育委員会も出かけて行きますし、小学校と高校との連携というのもありますし、高校生が来てくれて、小学生の学びをサポートしていただいているというのが結構ありますし、市の指導主事が高校生に指導助言している場面もあります。小中学校の取組に高校生がボランティアとして関わってくれる様にもなっております。こういうことが、一体として行われる様にここ数年でなっております。そのことが、実は小中学生を変えてくれることにも、大きく関わっているのかなと思っていますところでもございます。

水永 もう一つ、日向市には普通科高校が1校だけあるんです。日向高校といいます。ここが定員割れを起こしているんです。それは、隣町延岡市、そして宮崎市に有能な中学生が出て行くのが原因の一つだと言われています。何とか日向高校の魅力を中学生に伝えられないかということで、日向高校魅力向上プロジェクトという議論を始めたんですけども、私は、一番責任があるのは市長だと。日向市長は、日向高校は県立高校ですから、自分は所管ではないと思っていらっしゃる。もっと行政の長が地元の中学校の子ども達を、地元の普通科高校に進学させる様な、そういう魅力を伝えるということに責任があるんじゃないですか、という話をして、市役所の筆頭の課長さん2人を出していただいて、プロジェクトメンバーで半年間議論いたしました。その様な感じで、市の教育委員会と行政と産業界が高校も含めて、小中高含めて育てていこうという感じが、次第次第と出来上がって来たんだなという感じがします。他にもう一人いらっしゃれば、どなたかご質問やご意見などありませんか。

佐賀県武雄市 岡本委員

佐賀県武雄市から参りました岡本と申します。非常に驚くべきこととか凄いことだなと思いました。特にキャリア教育支援センターがあるのはさすがだなと。商工会議所が中心となって、キャリア教育に力を入れていただくというのは、教育現場としては凄く助かることではないのかと思いました。あと、「よのなか教室」の狙いと、子ども達に伝えたいことがしっかり明確にしてあるということ。これが、やはりこの「よのなか教室」の先生方が、どう

いうことを子ども達に伝えるかということが、明確であるということは継続的にやっていく中で大切なことだなと思いました。非常に参考になる中身だったと思っております。ありがとうございます。

質問ですけれども、先程もありましたが、日向にいる高校生達が、日向のことは好きだけれども就職したいところがないとか、そういうデータが示されました。佐賀の方でも似た様なことが起こっています。キャリア教育の中で考えられる地元の企業の魅力を発信するということはまた別、一緒かもしれませんが、例えば、地元で起業する、会社を創るとか創業するとかといったことに対して、何か具体的な施策といいますか、活動を行っていただければ教えていただきたいと思います。



清水 今年の1月24日だったと思いますけども、産業支援センター（ひむかBiz）というのを開設しました。皆さんご存知かも知れませんが、富士市のfBizをモデルにした、産業支援センターを構築いたしました。起業とかいろいろなことに対しては、例えば会計上どうなのかとか、有意義な補助事業は何なのか、とかそういったところがあるのですけれども、もっと本質として、それぞれ起業を希望されている方々のスキルに注目をして、どういう仕事を起こしたいのかということろを、専任のセンター長さんがお聞きをしまして、それに基づいていろいろアドバイスをしていくという様なやり方でございます。今、開所してから半年が過ぎまして、相談件数が6か月間で780件だったと思います。ひと月に100件から120件、1日に4件、多いときは6件ほど相談をやっておりますが、その中で起業された方が、これまで4件生まれております。相談者の内容からいきますと、起業希望の方は、圧倒的に女性が多い様でございます。これからまだ、1年、2年、動向を見守っていかなければならないところではありますけども、そういう、起業を目指している方々についても、ワンストップ窓口を作っておりますし、これにつきましては、当然、商工会議所や、金融機関などと連携をさせていただいて、取り組んでいるところでございます。以上でございます。

水永 はい。ありがとうございました。それではまだいろいろなご意見があるかと思いますが、パネラーの皆さんも交流会に参加されますのでまたいろいろご意見いただければと思います。

今まで、日向市における取組と考え方というところに限定してご紹介してきたんですが、これから先、宮崎県全体としては、どんなふうに展開を構想しているのかということ、4年前に、日向

にキャリア教育支援センターが設置されたときに、当時の県教育委員会の担当責任者でありまして、現在は県教育委員会の学校政策課主幹である北林さんが来ておられますので、少し紹介をしていただければと思います。よろしくお願いします。

北林 皆さんこんにちは。県の教育庁学校政策課の北林といいます。まさか、ここで話をするとはいった感じだったのですが、これまでの経緯とこれからの展望についてお話をさせていただきます。

この日向のキャリア教育支援センターの元々の出だしは、私がキャリア教育の研修を受けに行ったとき、大阪キャリアステーションの話を聞いたことでした。私が、それに惹かれた理由は、指導主事になりたてでしたので、中学校の教員としてやっていて、職場体験が単なる体験活動に終わっ



ているということ。そして、感想が、「楽しかった」「良かった」下手したら、「残り物をもらって美味しかった」。この職場体験でいいんだろうかというのが、私が職場体験を担当していて、ずっと思っていたことでした。そして、キャリア教育の話を聞いたときに、職場体験が何の狙いをもってやればいいのかをきちんと伝えてもらって、産業界と連携することが大事だということに思い至ったのです。

そして、もう一つ。先生達がこの職場体験で相当な負担感があると。いろいろなところに行き、話し、そういう負担感を少しでも減らしたいということで、このキャリアステーションを作りたいと、ずっと思っていました。そしたら、たまたまそういう部署に行かされて、壇上にいらっしゃいます水永さんと一緒に、当時、一番このキャリア教育を熱心に行っていた横須賀のキャリアステーションを見に行きました。そこで、横須賀の例を元に、構想し、壇上にいらっしゃいます今村教育長が、当時私の上司で学校支援監でしたので、学校支援監とともに日向市にターゲットを絞って、キャリアステーションを作ったという経緯があります。

当時、このキャリアステーションを作ったときの産業界の反応は、基本的に、商工会議所の方がいらっしゃいますけども、冷たかったです。なぜかといったら、産業界に Win が見えないんですよ。学校は助かります。そんなことをしてくれたら夢の様でしたけども、産業界に対して Win をどう伝えるかというのが非常に難しかったです。当時の社会情勢は、雇用創出だったんです。だから、決して人が欲しいわけじゃなかったんです。ところが、水永さんは予言されていたんです。あと、10年もしたら人手不足が始まると。だから、産業界は変わっておかなければいけないと。そういう論調で、産業界にアプローチしていきながら、このステーションを作ったところでした。日向の商工会議所の会頭さんを含め、協力していただき、市長部局にも協力していただき、そして、市の教育委員会にも一緒になって取り組んでいただいて、本当に、県と市教育委員会、産業界と市長部局が一体となって作り上げたステーションだと思っています。

教員として見たときに、このキャリア教育というのが、どういう役割をするのかとずっと聞きな

がら思っていました。これまでの進路指導が、どうしても職業観に頼る進路指導が多かった様な気がします。これは自分の経験としてです。これを、勤労観、つまり生き方としていかないと、将来には、今、子ども達が学んでいる職業は60%は無くなると言われている中で、職業観を身に付けるよりも、今はやはり勤労観の方が大事ではないかと。そうすると、生き方と表裏一体の教育ができると考えています。小中学校のキャリア教育を考えますと、そういう点では学校が職業を教えるのではなくて、なぜ働くのかということ、子ども達に教えていく教育になっていくのかと思います。そうすることは、当然、なぜ学ぶのかということに繋がっていきます。そうすると、学ぶ意欲、学力向上にも繋がって、小中学校に意味のあるキャリア教育が進んでいくのではないかと考えております。

学力向上に対して、先ほど三樹校長が、データとしてはありませんと言いましたが、全国学力学習状況調査において、キャリア教育を熱心にやっている学校の学力は高いというのは、これは実証されております。ですから、学力向上には間違いなく役に立つと思います。今度の学習指導要領にも、全ての教科において学ぶ意味・意義を教えなさいと書かれておりますので、キャリア教育と繋げた学習は、絶対不可欠だと思っております。

実は、私、昨年校長をさせていただきまして、現場に出たからにはキャリア教育を一生懸命やらなければいけないと思っていたので、当時の2年生の学年主任と、職場体験を核として、それまでの体験活動を全てキャリア教育で繋ぎまして、総合的な学習を一新しました。そして、水永さんと呼んだり、地域の方々と呼んだりして、キャリア教育をやってみました。

そこで、ちょっとこれはまだ仮説段階ですが、中学校の教員として、間違いなく定説であるのは、中学校2年生が荒れるという状況があります。この、中学校2年生が荒れるのはなぜかという、それまで勉強は入試のためのものです。そこで、部活動にも慣れてきました、目標もなかなかありません、入試もちょっと遠いです、そうすると、2年の後半というのは大体、私が勤務しているところは荒れるんです。荒れるといっても、程度にもよりますけど、崩れると言う。ところが、この年、私のいた学校の2年生が、崩れなかったんです。それで、その時は2年生良く頑張ったね、学年主任良く頑張ったね、という言い方しをしていたんです。そんなことを思っているときに、たまたま県の生徒指導の会がありまして、私は地区の理事長でしたから出席したんです。そしたら、各地区の報告がありました。そのときに、日向地区の理事長が報告をしたんですが、日向地区ってご承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、結構、小学校、中学校厳しい地区で、あんまり教員で行きたくないなという様な学校もあったりしまして。ちょっと厳しいところなんです。正直、地盤的にも斜陽というか、工場が沢山あるけど、なかなかまちが盛り上がっていないというところがあったんです。毎年、この生徒指導の会では、日向が今年はこの大きな事件がありました、こういうことがありましたと言って報告するんですけど。ところが、そのときの理事長が、「今年、何も無かったですよね。良く分からないんですけどね。」って言ったんです。それを聞いた瞬間に私は、おやっと思ったんです。中学校2年生が荒れる、なんで荒れるのか。そして、私が勤めていた南郷中学校と日向がなぜ荒れなかったのかと。私はこれを私なりの仮説として考えているところです。今後、データを集めながら、立証してみたいなと。県のキャリア教育センターの方に、これを是非考えてみてくれと依頼をしています。もしかしたら、小学校も中学校もですけど、先生達が、今まで武器にし

ていたもの、極論を言えば体罰、極論を言えば入試、頭から押さえつけながら、学ぶことは当たり前で、勉強するのは当たり前で、と言っていた時代から、そういう武器が通用しない、使えない時代に入ったときに、このキャリア教育というのは、子ども達自身が学ぶ意味や意義を掴む意味が必要になってくるのではないかと。そういう武器になり得るのではないかと私自身は今考えています。このステーションの取組を、今後、県教育委員会としては、県下に進めて行きたいと思っております。今年から、もうすでに2市で取組が始まり、さらに、1町で次年度からスタートさせたいと考えています。そして、県全体に、このステーションを広げて、宮崎県全体のキャリア教育を進めたいと思っております。そして何より、このキャリア教育で一番影響を受けるのは、学校の先生達です。学校の先生達は、一度たりとも、いや、もちろん出た人もいますけども、ずっと学校という世界にしかいません。この人達が、社会を知らずして教育していること自体がおかしなことです。ですから、このキャリア教育というのは、生徒を変える、もしくは地域を変える以上に先生達を変えていく手段になり得るのではないかと考えておりますので、県としても今後キャリア教育を進めて行きたいと思っております。以上です。

水永 ありがとうございます。あの、拍手がわいてしまいました。想定外の話をして、キャリア教育をやった成果みたいな、どう評価したらいいかはとっても難しいんですね。学力という目に見える形と、先ほど言われた様に、意欲がわいてきて態度が変わるといえるのか。もし、そういうのを立証できるものならば、積極的に挑戦していく必要があると思いました。少し時間が押してしまいました。最後にこれまでのいろいろな話を、会場の方からのご意見もいただいたんですけども、それを踏まえて、一言ずつおっしゃっていただければと思いますので、黒木さんの方からお願いいたします。



黒木 一言お話をさせていただきます。今、日向市では、中学生の職場体験を2日間行っていますが、大王谷学園中等部8年生(中学2年生)が、今年、試行的に社会体験ということで、3日間に延長して実施されることになりました。この3日にするためには、先生達の非常に企業探しの苦勞がありますので、「14歳の挑戦」が富山県で実施されていますので、先生方と一緒にこの夏、視察に行ってきました。日向市は「14歳のよのなか挑戦」という名称にして、「14歳のよのなか挑戦」の協力事業者の会を作って、先生達が相談し易くて、即社会体験ができる様な環境づくりをして行きたいと考えています。もう一つ最後にこれからの産業界は、市の教育委員会、そして学校の先生達に、子ども達が将来をどう生きるかという人材育成に対して、感謝しつつ、さらに連携強化を図りながら、選ばれる日向市に作り上げていかなければいけないと、これからも頑張っていきたいと思っております。ありがとうございます。

清水 市役所にも、中学生、高校生、それから大学生と、インターンシップでお見えになります。いろいろお話を聞くんですけども、やはり、地域の足元のいろいろな資源だとか、他に誇れるところを、皆さんがあんまり知っていらっしゃらない。ということは、我々が反省をしなければならないんですけれども。

私、商工観光部長ということで、観光部門も預かっているんですが、そういう意味では、日頃から市民の皆様を含め、子ども達に、「地域の宝」というのをどういうふうに見せて、そして、魅力を体験していただくかと言うところも合わせて考えていかなければならないなと思っております。地域の魅力は「お祭り」だったり、「文化」だったり、「食」だったりありますけれども、そこに介在するのは、職業人、仕事の匠だったり、これは長けているよという方が結構いらっしゃいます。そういったところのマッチングの機会を作るのも我々行政ではないのかなと思っております。私も、「よのなか先生」に登録しております。子ども達に2度ほど授業をさせていただいたんですけども、非常に明るく、いろいろな反応が返ってきます。その辺の達成感も合わせて、仕事として、そして、日向の大人としてこのキャリア教育、それから産業人育成ということで、一生懸命頑張っ参りたいと思っております。本日は本当にありがとうございました。

三樹 学校としては、まず先生方に覚悟をして欲しいと思っているんです。勉強が出来て成績が優秀で、有名な大学に行って、大企業に就職することだけが成功モデルではなくて、やっぱり、人のために喜ばれて感謝される、例えば、介護の仕事の人の価値観であったり、仕上がりには誇りをもつ職人の喜びであったり、家畜に愛情を注いで人々の食に貢献する人の生きがいや、本当に多種多様な価値観に触れさせて子どもを育てなければ、大きくなったときに少ない価値観だけになり、ドロップアウトしてしまうんです。だからこそ、先生達は教育課程を開いて、沢山の価値観を注入しないといけない。そういう意味では教職員の覚悟が必要だと思います。

それから、今度は地域の大人も含めてなんですけれど、大人達の学校に対する当事者意識が欲しいと思っています。地元に着しない若者を嘆くのは簡単です。しかし、これまでにどれだけ地域や産業界が、若者に関ってきたのでしょうか。学校に足を運んだのでしょうか。地域にこだわりが薄れているんです。例えば、本校でも、子ども会には入らないし、区にも入らない児童も出てきました。学校は多くの役割と責任をもたされて、いっぱいいいのこともあるんです。だからこそ、多くの大人達が、学校に対する当事者意識をもった大人たちが欲しいと思っています。それから最後に、子ども達に影響を与える保護者の方達にもアプローチしたいと思っています。日向市でアンケートをしたときに、保護者は子ども達の進路を学力ではなくて、子どもの行きたいところを優先するという意識がはっきりしています。良い言い方をすれば個性尊重、別の言い方をすれば子どもに努力をさせない、あなたの好きなところに行っていよいよという責任回避にも取れます。そういう意味では、やはり保護者にもいろいろな価値観に触れて欲しいと。例えば、日向市にはビール製造に欠かせないものであったり、携帯電話やマグネシウム、ニッケルなど国内シェアの半分近くを握るものもあるんですけれども、それが上手く伝わっていません。そういう意味でも、キャリア教

育に多くの保護者を巻き込んでいかなければいけないとも思っております。

委員会活動であっても、係活動であっても、責任や役割がしっかりあるんです。学校内でそういう勤労観をしっかり育てておいて、社会に飛び立たせなければいけないと先ほどの話から思った次第です。今日はこの様な機会を与えていただき、ありがとうございました。

今村 最後になりましたけれども、何点か私の感想を申し上げたいと思います。当時、日向市と一緒に頼みに行った北林さんが、日向をそう見てたということが良く分かりました。確かに厳しいところはあるんですけれども、それを改善すべく、今一生懸命頑張っているところでもあります。キャリア教育に取り組むと学力が上がると言いましたけれども、学力は決して高くないものですから、これを続けられずずっと上がっていくかなと、期待をしながら取組をしているところです。

まず、一つ目ですが、そのキャリア教育支援センターをどこに置かかというのは、当初からやっぱり問題であって、これを商工会議所に置きたいと思って、最終的には商工会議所と教育委員会と市長部局と相談をして決めて下さいとお願いをいたしました。しかし、我々の気持ちとしては、商工会議所に置かないと駄目だということがあって、上手くそうやって今があります。産業界、企業の方から向いていただけるという、このことがとっても重要なことだという今実感をしているということが一つです。

もう一つは、教育も市長部局も産業界も含めて、やっぱりまちづくりということを考えていかなければいけないって思っています。宮崎市長が冒頭のあいさつでも言われましたけれども、人づくりというのはまちづくりなんです。究極のところはまちづくりが人づくりになるという、そういうことを私達は思っています。今、三樹校長が言いました様に、日向には本当に全国の半分以上のシェアを占める様な工場もいっぱいあるんです。あるけれども、そこで働く人達、他所から転勤をして来たりするんです。家族を連れて来たりするんですけども、日向市に住んで、そこで子ども達の教育をしながら、自分はそこで働くという構図が一番いいのに、宮崎市や延岡市に住んで、家族はそこに置いて自分だけ通勤してきて働く人だっているわけです。それは、子育てとか教育が日向市は、選ばれ無かったという話だと思うのです。ですから、日向市でやっぱり子育てが出来るというのは、福祉だとか、税だとか、教育とかいろいろなことがあって、ここで子ども達を育てたいなと思って選ばれて、そこで仕事出来るというのがとても理想だという様に思うんです。そういう教育、まちづくりを私達は教育委員会も市長部局も産業界も一緒になってやっていきたいなということがもう一つの願いとしてあります。

最後の一つは、学校の先生達は、本当に忙しくて企業の方に来て欲しい、地域人材を活用したいと思ってるのだけれども、それがなかなか出来なくて、何もシステムが無いところでは、どこどこに私の知り合いがいるからその人に来てもらいましょうと、そういう繋がりだけで人を呼んでいて、毎年毎年、同じ人が来たりするんです。しかし、こういう仕組みがあると、いろいろな人に関ってもらえるというありがたさがあります。

この仕組みの中で一つだけルールがあるのは、先生が学校長を通したり通さなかったり、直で依頼をしたりしますが、キャリア教育センターにこういう人に来て欲しいというオファーを出すと、

キャリア教育支援センターにおられる3名のコーディネーターの皆さんがどこの誰がいいだろう、発達段階や、こんな子ども達だからと考えていただいて、マッチングをしていただきます。そして、どこの誰々を派遣しますと学校に連絡があったら、企業の方が学校に来るのでは無くて、学校の先生が必ず企業に行って、打合せをすることだけがたった一つのルールなんです。それは、先生方に地元の企業のことを知って欲しい、働く姿を見せたい、いろいろなことを理解してもらうという意図もあって、そこに行って、その工場の様子なり、その方の人となり、いろいろなことを見て、聞いて、体感して、そして、こんな授業を組み立てようとする様にルール化していただいております。そういう、ルール化された一つのシステムというのを根付かせるということが、とても重要なことだと思います。

取り組み始めて5年目になります。まだまだ、成果に繋がるというには大きなものはないのかもしれないけれども、子ども達は確実に変わりつつあるんだろうと実感をしています。これを、予算を切らさないで、人の縁を切らさないで続けるということがとても大事です。やはり教育で大事だということは、やり続けるということだと私は思っています。成果はその先に付いてくるもので、継続すると必ず力になっていくという様に思っています。これからもこのメンバーでまた頑張っていきたいと思っています。以上です。

水永 ありがとうございます。今、若者の地域定着のためにということで、行われている施策は、就職を直前に控えた高校生と大学生と地元企業とのマッチングなんです。さらに、今年は保護者の方に地元企業の説明会とかをやるということが行われています。これは、とても重要な施策なんですけれども、対処療法です。抜本的な解決にはならないんです。抜本的な解決のためには、義務教育のときから、小学校、中学校のときから地元企業の魅力と、地元の暮らしの魅力を伝え続けていく必要があるのではないか、地元企業の魅力は、地元企業の経営者が語らないといけない、そこで働く人々が語らなければならない。普段に暮らしているおじさん、おばさん、お兄ちゃん、お姉ちゃんが地元で生活する魅力を語らないといけないと思うんですけども、これって難しいんです。自分の魅力を話すのは、なんとなく気恥ずかしいんです。だから伝わってこなかった。でも、自分が働くという魅力と、暮らしているという魅力を語ることは、決して自慢話ではないと思う必要があるんじゃないかと思います。こういった運動が全九州のいろいろなそれぞれの地域で広がっていくといいなと思います。今日は長時間にわたりまして、ご清聴ありがとうございました。